

教科書にあらわれたあいさつ表現

—文化教授のあるべき方向—

広島大学大学院 深 沢 清 治

0. はじめに

海外旅行が年々盛んになっていくと共に、「ことばと文化」といったものへの関心も高まりをみせている。それは、異文化間のコミュニケーションを通して、言語だけでは到底理解できない文化の側面があることに人々が気づき始めているせいでもあろう。従来、国際理解教育は各教科における共通の関心事であるが、教室における英語教育では、文化の側面は重要とされながらも、せいぜい授業の副産物的な存在としてしか扱われず、技能としての面のみに重きが置かれているのが現状であろう。さらに、文化という概念自体にも様々な見解があり、一致をみていない。以下、英語教育における文化とは何かについて考察すると共に、教室における文化教授の教材面からのアプローチとして中学校の教科書にみられるあいさつ表現にあらわれた文化を取り上げてみたいと思う。

1. 英語教育の目的・意義—文化教授の観点から

外国語科の目標として、指導要領では外国語による理解・表現能力を伸ばすと同時に、外国の人々の生活やものの見方などについての理解が掲げられている。しかしながら、後者の内容、指導については、文法事項のようないわゆる技能面に対するような細かい説明は成されていない。言語学習の最終の目的はコミュニケーションにあるのであり、言語がそれぞれの属する文化に色づけされている以上、社会文化的知識を欠いた外国語能力は不十分と言わざるを得ない。従って、生活習慣といった overt な側面と、ものの見方、価値観といった covert な面とを統合した文化面が技能面と同様に強調されるべきであると思われる。この際、文化を広い意味でのすべての学問と取ると、英語教育では不可能であり、あくまで言語と関係した、つまり英語を通してしか理解できない文化と考えるのが妥当であろう。その知識が英語によるコミュニケーションをより深いものにするとと思われる。

外国語教育の目的を大きく communicative competence と cross-cultural understanding に分けている Chastain (3: 406) を初め、文化教授の重要性は、各方面から指摘されている。Lado (7: 149-150) は、文化の型や価値といったものを理解せずには、真の言語学習とは言えないとし、特に教育的な価値として言語が教えられるならば、文化的内容を理解する事がより重要であると主張している。人間形成といった教育的な価値を考えれば、生徒の単一的文化の horizon を広げ、異文化に対する正しい認識、態度を養っていくことも大切だと思われる。これに関して Kirch (5: 415) は、外国語によるコミュニケーション能力は、使わなければ忘れられてしまうが、文化の学習は最後まで残り、外国語学習の利点は、外国に行かずに異文化に浸ることができることであると述べている。外国の人々のものの見方が異っていても、それは善悪の問題ではなく違っているだけであると認識するのは、国際理解の面からも意義があると思われる。

2. 文化教授のアプローチ

言語が文化を構成する重要な要素であり、両者が不即不離にあることから、文化教授は外国語学習と同時に行われるべきであるとされながらも、実際は文化の定義、言語と文化の関係、文化教授の目的を繰返し摸索しているのが現状であろう。そこから具体的に、何を、どう教えるのかを検討していくことが必要に思われる。どこから手をつけるかを考えた場合、いくつかのアプローチが挙げられる。

- ① 教材の構成 (text, software, hardware)
- ② 文化内容の指導法
- ③ 文化内容の理解度テスト, 評価
- ④ 教員養成のカリキュラム

この中で中高、及び大学の教養までを含めた教材選定をまず最初にもってくるのが望ましいと思われる。そこで現在の文法体系の難易度に基づいた教材配列と同様に、文化内容にも配列が必要となってくる。文化内容は、単語の背景、表現、さらに発想レベルなどが考えられるが、学習者の外国語能力に応じて基礎的言語構造の違いや言語に基づいた平易な生活習慣から、目標文化のより内在的深層へと深めていくことが考えられる。

以下、中学校段階で最初に出てくる英語のあいさつ表現、またそれに伴う会話の分析を通して、それらの表現の中にみられる文化を探り出し、またその指導についても考察していくことにする。あいさつ表現を選んだ理由は、中学1, 2年の英語学習初期に出てくることが、また, Kirch (5:415) によれば、対話というものが、ただの情報交換だけでなく、ある文化のコンテキストにおける個人間の交流であり、その文化を表す最も顕著なものだからである。特にあいさつ表現は、対人間コミュニケーションの入口にあるため、その違いに基づいた文化教授は意義があるものと思われる。

3. 中学教科書、その他にあらわれたあいさつ表現

まず中学校教科書, *New Crown*, *New Horizon*, *Total* からあいさつ表現を拾いあげてみる。

Hello, Bob.

How are you, May? I'm fine, thank you.

How do you do, Ken?

Good morning, Miss Kato.

Good afternoon, Mr. Tanaka.

Good evening, Mrs. Wilson.

Good night.

Good by.

Have a good time.

Say hello for me to both your brother and sister.

さらに、対人間による informal 及び formal な表現の違い。また生活習慣、価値観の特徴が現われた表現、その他頻度の高いものをいくつか拾い上げてみると、

Hi, Bill.

Fine, thanks.

How is Mary?

How was your day?

It is good to see you again.
(nice) (meet)

Say hi to your mother.

Take it easy.

So long. See you soon.

Have a nice day (weekend, summer).

4. 表現のちがいにあらわれた文化の差

次に、教科書内外にあらわれたあいさつ表現から、日英語及びその背後の文化の差を比較してみたい。

第一に、英語国民は、対話の際に、日本人が相手の地位、年齢などを問題にするのに対し、名前を意識する。「先生」と“Mr. Kato”は、その対照例であろう。さらに、Hello, Hi のあとに殆んど名前を付ける。紹介された2人が名前を言いわずに“How do you do?”となるのは不自然である。日本語の親族間の呼びかけについて鈴木(9: 148)の記述が興味深い。1人の人間が英語の1人称“I”に対して幾通りにも呼び名をかえるし、また逆にさまざまな呼び方をされる。たとえば、「先生」「兄さん」「姉さん」「先輩」「後輩」といった呼び方が英語では殆んど名前で行なわれる。この日英語の差を、Condon(4: 19-20)は、*symmetrical relationship* と、*complementary relationship* とに区分している。前者は、年齢、性別、階級などの類似性に基づくもの、つまりそれらの差を小さくしようとする一般的アメリカ社会の傾向である。教授が学生に自分を *first name* で呼ばせることはその一例である。後者は、それらの差を会った瞬間から作ろうとする日本のような社会の関係である。その差は、たとえば、どちらが長くおじぎをするかといったような *non-verbal* な面もあるが、ここではことばによる表現に限ると、「先輩」「後輩」といった表現が、「同輩」よりもはるかに多く使われている点にも見られる。「先輩」「後輩」という単語が英語に見当らないことから、両者のものの見方の差がうかがえる。ここで Condon (ibid.) は、表現のちがいが、ことばの違いによると言うよりは、文化間の価値観の違いによると述べている。このような差は、コミュニケーションをめざした英語教育には欠かせないものと思われる。

第二に、英語国民は一般に話好きであると言われているように、あいさつ表現も豊富で、日本語では奇異に感じられるものも見られる。また、あいさつ表現の中には、あまりしばしば用いられて殆んど意味を持たないものもある。Smith(8: 115-116)は、“How are you?” に対しては常に“Fine”の答が期待され、別に聞き手の健康状態を尋ねているのではなく、話し手と聞き手が同じ社会、文化の中の一員であることを確めているに過ぎないとしている。

さらに、別れのあいさつ表現の多くが命令形を取ることから日本人にはおしつけに感じられることなど、このほかにも違いが認められるだろうが、大切なのは単に日本語の対照訳をつけるのみでなく、個々の表現にあらわれた日本語とは異なった面を理解させ、さらに日本語に戻ってその特徴を考え合わせてみることであろう。言語構造に留まらず、それに関わる文化の比較にまで掘り下げていけば、あいさつ表現、対話文に見られる基礎的な文化の違いでも生徒の異なった言語文化、及び外国語学習への興味、関心を深めてくれるかもしれない。

5. おわりに

教材面に視点を置いた文化教授の問題点の1つは、いかにして文化的情報を見出すかにあると考えられる。対人間コミュニケーションの入口であるあいさつ表現にも日英語間で数々の文化の相

違が見られる。これを広く日英語の表現比較，さらには単語のレベルを含めると，背景となる様々な文化の違いが存在するはずであり，それらが英語の教授，学習をより興味深い，meaningfulなものにしてくれると思われる。

〔 参考引用文献 〕

1. Beaujour, Michel (1969) "Teaching Culture in the Foreign Environment—Goals and Non-Goals," *MLJ* 53, 5, 317-320.
2. Brooks, Nelson (1964) *Language and Language Learning: Theory to Practice*. Second ed. Harcourt, Brace & World Inc.
3. Chastain, Kenneth (1976) *Developing Second-Language Skills: Theory to Practice*. Second ed. Rand McNally College Publishing Company.
4. Condon, John (1976) "Cultural Patterns of Communication and Language Teaching," *ELEC Bulletin* No. 54 Summer 18-24.
5. Kirch, Max S. (1970) "Relevance in Language and Culture," *MLJ* 54, 6, 413-415.
6. ————— (1973) "Language, Communication and Culture," *MLJ* 57, 7, 340-343.
7. Lado, Robert (1964) *Language Teaching: A Scientific Approach*. McGraw-Hill, Inc.
8. Smith, Henry Lee, Jr. (1969) "Language and the Total System of Communication," Hill, Archibald A. (ed.) *Linguistics*. Voice of America, Washington D. C.
9. 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店。